五部心観について

八田幸雄

五部心観は全剛界マンダラを理解する上に極めて重要な資料であることは言を俟たない。このことは既に先学によつて示され、また宋訳の金剛頂経とよく一致するとの報告もなされている。しかし今日金剛頂経の梵本が公利された以上、改めて五部心観を考察する必要がある。特に悉曇文字の解読と金剛頂経の梵本との対象の上に五部心観の象徴もようとするものを把握しなければならない。

別表は五部心観に記された梵字を金剛頂経所説の真言文と対照したものである。五部心観の番号は大正蔵経図像部に記載の番号を示したものである（実際は園城寺本に依る）。経は施護訳の三十巻金剛頂経に出る音写真言を記述の順に番号を附したものである（梵本とも対照）。五下とあるのは五部心観の図像の下に観法が示されているが、そのところに記されている悉曇文字が金剛頂経に相当する場合にはその経典記載の音写真言の番号を記す。

別表を見るとI 30〜35にはその下に金剛頂経で説く観法が示されている。IIでは五部心観の図像に四波羅蜜を欠くが経では四波羅蜜の真言を内四供の真言を説き、五部心観には内の四供に四波羅蜜の真言を充当し、外四供の香華には内四供の嬉鬘の真言を充当している。68以下71の尊には《oṃ＋guhya＋（尊名）＋擺子》の形式の真言を作成している。IIIでは四波羅蜜を両者とも欠く。93〜104の尊には《oṃ jñāna＋（尊名）》の形の真言を作成している。Ⅳでも四波羅蜜を欠く。126〜137の尊には《oṃ sarva tathāgata（名尊）pūjā-megha-samudra-spharaṇa-samaye hūṃ》の形式の真言が作成されている。

以上五部心観の真言と初会の金剛頂経のそれとの関係を概観したのであるが、五部心観は初会の金剛頂経に準拠したものであると考えられるのに何故このように細部においては内容が異つているのであろうか。

宋訳金剛頂並に梵本金剛頂経を見るとそれはI大マンダラ、II秘密マンダラGuhyamaṇḍala、III法マンダラDharma-

		Ⅰ 大マンダラ			Ⅱ 秘密マンダラ			Ⅲ 法マンダラ			Ⅳ カツママンダラ					
		五部	経	五下	五部	経	五下	五部	経	五下	五部	経	五下	五部	経	
大日		1	1		39	109		72	149		105	179		138		203
四仏	阿閦	2	2. 3. 4		40	110		73	150		106	180		139		204
	宝生	3	5		41	111		74	151		107	181				
	無量寿	4	×		42	112		75	152		108	182				
	不空	5	×		43	113		76	153		109	183		Ⅴ 四印		
ⓐ 金剛部	薩	6	6		44	114		77	156		110	184		140	206	
	王	7	7		45	115		78	157		111	185		東	207	
	愛	8	8		46	116		79	158		112	186		南	208	
	喜	9	9		47	117		80	159		113	187		西	209	
ⓓ 宝部	宝	10	10		48	118		81	160		114	188		北	210	
	光	11	11		49	119		82	161		115	189		東南		
	幢	12	12		50	120		83	162		116	190		南西		
	笑	13	13		51	121		84	163		117	191		西北		
ⓒ 法部	法	14	14		52	122		85	164		118	192		北東		
	利	15	15		53	123		86	165		119	193		左下角		
	因	16	16		54	124		87	166		120	194		右上角		
	語	17	17		55	125		88	167		121	195		右中上		
ⓓ 羯磨部	業	18	18		56	126		89	168		122	196		右中下		
	護	19	19		57	127		90	169		123	197		右上角		
	牙	20	20		58	128		91	170		124	198		右下角		
	拳	21	21		59	129		92	171		125	199				
四波羅蜜	金剛	22	22			*130								Ⅵ 一印		
	宝	23	23			*131								145	212	
	法	24	24			*132										
	業	25	25			*133										
ⓔ 内四供	嬉	26	26		*60	⁂134		97	⦿		126	⦿				
	鬘	27	27		*61	⁂135		98	⦿		127	⦿				
	歌	28	28		*62	○136		99	⦿		128	⦿				
	舞	29	29		*63	○137		100	⦿		129	⦿				
ⓕ 外四供	香	30	30	57	64	⁂		101	⦿		130	⦿				
	華	31	31	58	65	⁂		102	⦿		131	⦿				
	灯	32	32	59	66	●	138	103	⦿		132	⦿				
	塗	33	33	60	67	●	138	104	⦿		133	⦿				
ⓖ 四摂	鉤	34	34	61	68	⦿	139	93	⦿		134	⦿				
	索	35	35	62	69	⦿		94	⦿		135	⦿				
	鎖	36	36	172	70	⦿	147	95	⦿		136	⦿				
	鈴	37	37	(　)	71	⦿	*148	96	⦿		137	⦿				

ṇḍala、Ⅳ羯磨マンダラ Karmamaṇḍala に四印一印の計六種のマンダラが示されている。そして各々のマンダラの世界に入るための観法として大印、三昧印、法印、羯磨印を示そうとしている。その中Ⅰ金剛界大マンダラは三十七尊の完成した形態が示されているが、Ⅱ以下に至つては三十七尊全部の記述は無く、またそれぞれのマンダラに示されるであろうところの大三法羯の四種印も、それぞれにふさわしい印を考察するに至らぬ段階で経典が成立している。—尤も金剛界大マンダラがすべての基礎であるからそれでもよいとは考えられるが—。しかし五部心観にあつてはマンダラ諸尊の形態も示され、Ⅰ以外の各マンダラについても三十七尊を意識して諸尊を示し、それぞれの尊についても観法を明かにし、金剛頂経に無い真言も新に考察して適宜各尊の下に挿入したと考えられる。

しかしこゝで問題が残るのは何故四波羅蜜が欠けているのか、また各尊の下に示された印契は何を基本に考えたか、五仏は五相成身等の真言を充当しているのは何に依るか等の問題である。この問題を解明するための一つの手がかりは施護訳以外の金剛頂経の類本、即ち略出念誦経、不空訳二巻金剛頂経、蓮華部心念誦儀軌等の諸本とを比較対照してみることである。これ等の儀軌群をBグループと呼ぶことにする。

施護訳の三十巻金剛頂経と梵本とはよく一致する。不空訳三巻金剛頂経も、金剛界品はよく吻合する。十八会指帰の記述によれば不空訳の基いた梵本に果して施護訳のように降三世品以下の章が同じ内容で記述されていたかどうかは分らないが少くとも金剛界品においては施護訳と同一のものがあるように推測される。したがつて五部心観を研究対象とする限り不空訳三巻本と施護訳金剛頂経は同一グループとして扱つてよい。これ等をAグループと名づける。A群についてはその概略を先に述べたのでB群についてそれを示すことにする。

B群の特色はマンダラの部分が三種である。即ち羯磨会、三昧耶会、供養会である。施護訳に見られるⅢ法マンダラに相当するものは無い。B群の中で特に問題となるのは略出念誦経である。この経は印度原典の忠実な翻訳ではなく、中国で編算されたものである。例えば音写真言の記述の後には論曰……しとして真言の中国語訳がつけ加えられている。また他の箇所にも増補した点が見られる。しかし略出念誦経の中に記述されている三種のマンダラと観法はインド原典にあり、この古い形態を骨子として現存の略出経が作成されたとみてよい。今この古い部分を仮に「原略出経」と呼ぶことにする。原略出経に示されている羯磨印、三昧耶印はA群経典で大三法羯の四種印に発展し、更にこの印を発展的に示したのが五郎心観の金剛界大マンダラ各尊の印であると考えられ

る。原略出経においては四波羅蜜菩薩は十六尊の次に配され、また金剛界三十七尊の他に賢劫十六導、外金剛部に相当する尊も記されている。

次に不空訳二巻本、並に蓮華部心念誦儀軌についてであるが、四波羅蜜菩薩は五仏の直後に示され重要な位置に昇格している。四波羅蜜は阿閦等の四仏と一体化したものとして、四智を出現するもとのものとなつている。そこに密教々理の体系化が進んでいることを実証している。施護訳の経典では十六尊の後に出、またⅢ法マンダラ、Ⅳ羯磨マンダラには見られない。五部心観の秘密マンダラの部の嬉鬘歌舞の内四供に経の四波羅蜜の尊の真言を配当しているのは教理発展の過渡的な形態であると見られる。

五仏についてはA群、B群ともに教理の発展と相俟つて観法の内容が展開していく、簡単に示すと五仏を中心としたマンダラが次第に重要となり様々な肉付けが見られる。五部心観においても最初に出る五仏の尊像の下にある真言と、下図の印はすべての観法の基礎になる印を示している等である。

以上A群、B群の類本を見る限り観法の立場では次の順序で組織されて来たと考えられる。第一の段階、十六尊を中心とした。第二の段階、五仏、十六尊、内四供、外四供、四摂。第三の段階、五仏、十六尊、四波羅蜜、内四供、外四供、四摂。第四の段階、五仏、四波羅蜜、十六尊、内四供、外四供、四摂となる。このようにして諸尊のマンダラが組織され、次いで印契、真言、図像が作成されて来たと考えられよう。このように見ると五部心観の性格がおぼろげながらに解明出来るように思われる。

五部心観の観法は原略出経を始めB系の経典が基礎となつていた。やがて三十七尊のマンダラの教理が組織され、一方に大マンダラ、秘密マンダラ、法マンダラ、羯磨マンダラの四曼へと展開したA系の経典が出来、更にこの中で大印、三昧耶印、法印、羯磨印の四種印を組織し、経典を大きな体系に整理したのが宋訳に見られるようなA群の経典である。五部心観はこのA群の経典をもとに金剛界三十七尊の体系に観法をまとめあげようとしたものとみられる。しかし金剛界の観法としてはB系の根幹に流れているものが根強く存在し、これが現行金剛界法のもとになつている。

以上の考察からみて五部心観は略出念誦経に基いたものでないことは勿論、善無畏本（五部心観の基いた梵本）―略出経―真実摂経―蓮華部心念誦儀軌等に展開して来たものでもない。五部心観の梵本は施護訳に対応する梵本に基づき、一方にB系の観法を参照しながら、金剛界三十七尊のマンダラの体系の中に観法をまとめ、A系金剛頂経金剛界の精神を明示しようとしたものであるとみられる。